

序文	委員意見	これからの25年、大切にしたい思想・価値観
自然への畏敬と感謝を抱けるまち	・動植物や人間、機械、AIとも渾然一体ということを目指し得るのではないか。やはり京都には自然に対する非常にユニークな感性があり、自然と人間は、お互いがお互いを支配し使うような関係ではない。今後の世界において、AIなどの新しい知性に対しても、同様に使う、使われるだけではない関係性を構築できるのではないか【安野委員】 ・「京都を愛する人が」を主語にしてはという意見があったが、少しロマンチックなワードがすごくいいと思った。「京都を愛する、そしてこれから愛していくであろう人が」というふうに、未来に広げていくこともできるし、あるいは「京都を愛し、そして愛していくものが」でも良い。鴨川や山々が京都を愛しているか分からないが、人間以外となると苔も山もみんな含まれるかもしれない【池坊委員】 ・人間以外のアクターも入れるべきで、これからの都市を考えていく上で、人間だけではなく、植生や自然、動物や微生物など、「マルチ・スピーシーズ・モア・ザン・ヒューマン」のようなコンセプトも加味した都市のデザインを考えていけるとよい【杉田委員】	弱いつながりもデザインした「0.1市民」を数多く作っていく
歴史と文化を介して人間性を回復できるまち	・「100%のものを1%残す」とことと「70%のものを30%残す」ことは対立構造ではなく、100%ではないものを数多く残せるような方向性も必要。例えば茶室だと、文化財に該当する茶室部分を100%で遺せたとして、水屋などの併設部分が置き去りになると100%での活用はできない側面もある。「遺跡として残す意味」と「活用を前提として残す意味」の2点を踏まえてほしい。その観点でいけばそれぞれにベターの意味は変わってくると思う。【伊住委員】 ・京都は「世界を意識して作り上げる都市」ではなく、「京都らしさを追求する都市」であるべきだと感じる。世界を意識して町づくりを進めると、先進都市に見られるような高層ビルや無個性な街並み、近未来的なインフラといった「均一化された景色」に近づいてしまう可能性がある。京都らしさの追及の結果、京都のスタンスや独自性、文化的価値が世界中の人々に愛され、大切にされるまちとなるのが京都にあったまちづくりだと感じる。【大竹委員】 ・町家の保存においても、完璧なものを残して横にコンビニという世界観ではなく、なんとなくベターで数を増やしていくことが大事【杉田委員】	脱成長・脱競争の社会へ。ベストだけでなくベターも認める
	・京都の千年の歴史は他の都市にない。まちの中にも何百年のものがあり、文化も千年前から語られる。京都こそ、参照点があるから先を考えられる。【安野委員】 ・悠久の歴史に、その時々を生きた人々の歩みにいつでも私たちが立ち戻れることがとても意義あることであって、どのような未来を描いて、時に歩んできた道を省みるようなタイミングがあったときに、常に過去と照らしてフラットなポジションに帰ることができることが京都の大きな強みだと思う。いつでも私たちが過去に参照点を持ちそれと自分自身を相対化できるという歴史観が流れていると、過去を意味あるものとして今のビジョンに包含できるのではないか。【池坊委員】 ・私たちができることは常に、過去を参照することと今日に向き合うことだけ。今から1000年「先」の未来を見据えるということも重要な視点だが、1000年「前」から今という超長期目線に立てる都市というのは稀有である。その立場で考えることは必然的に1000年「先」を見据えることではないか。その上で、必要なタイミングで重要な参照点を見いだせるかどうかという点にはテクニックが必要だと思うので、公民連携のネットワーク構築も重要【伊住委員】 ・超長期的な視点を考える上で重要なのは「過去を振り返ること」である。未来は予測できないため、過去に目を向けることで人間が人間であり続ける限り失われないものが見えてくる。個人的には、それは「衣食住」と「遊び」に集約されると考える。前者は生きるために必要な基盤であり、後者は幸せで豊かな生活に不可欠な要素である。もし「遊び」がなければ、生きる意味や価値が失われるのではないか。【大竹委員】 ・一旦、2050年、25年後というのを忘れて、それこそ100年や1000年という単位で、私たちがどう京都を愛し続け、愛され続けたいのかを考えてもいいのでは。【三川委員】	超長期目線で考える
自他の生とともに肯定し尊重し合えるまち	・薄くつながっている人も、ある種の主体として捉えた方がよい。現在は、基本的には住んでいる人が1つ権利を持っており、住んでいない人は全く権利を持っていないが、そこをもう少し滑らかに、0.01だけ権利を持つ人がいてもよいのではないか【安野委員】 ・働き方や生き方が多様化する中で、京都への関わり方も多様化する。これまでも多様な主体の営みによって京都というまちが紡がれてきた歴史も考慮し、これからは市民の概念を広げ、その範囲をどう定義するかが重要な論点となる。また、市民税を払う「住人」以外の人々がどのように京都に関わり、税を納める形態（観光税やふるさと納税など）をどのように整えるかも議論すべきである。京都に関わるすべての人々が行政サービスを支える可能性があるため、この点も考慮する必要がある。【大竹委員】 ・京都の人は洛中や洛外という考えがあり、私は山科出身なので、それこそ京都の人ではないという認識がある。そういうものも含めて京都らしさだとは思うが、私自身の状況も重ねると、「京都を愛する人」というくりはすごく素敵【大井委員】 ・0.1という単位は「1の存在を認識し、且つ1よりも小さい単位」であるとともに、昨今の「2.0」「3.0」といった成長型に対するカウンター的概念のようにも思われ、原点を見つめ直すよい概念ではないか【伊住委員】 ・京都で暮らしているが、京都市民と自信を持って主張できないというところが本音である。ただ、京都を好きかどうか、愛しているかどうかというと、愛している自信はある。それを考えると、やはりこの愛のグラデーションというところは、あまり問わないほうがいいのではないか【三川委員】 ・京都のまちの価値とは、人と人の繋がりや、それによって形成される網の目そのものであり、その豊かさ。どんな形であれ、自分がその網の目の一部としてあるという事実を感じられたり、可視化できたり、そこに貢献することができる仕組みや考え方を打ち出すことはできないか【田口委員】 ・京都に関係する人、住む人みんなが自分の役割を理解したうえで、他者に対して礼節を尽くすこと。礼節を尽くしたうえで、協調、協力しながら、愛をもってみんなで京都をつくっていくことが求められる。誰一人無駄な人はいないので、自己を卑下することなく、他者を軽んじることなく、京都をつくるものの一人として共生することができればいいかなと思う【都地委員】	弱いつながりもデザインした「0.1市民」を数多く作っていく

序文	委員意見	これからの25年、大切にしたい思想・価値観
自他の生とともに 肯定し尊重し合えるまち	・地図を作るよりもコンパスを持つ方がいい。ゴールに向かうときに、方位磁針を見ながら、軌道修正しながらたどり着けるというやり方がある。現代では地図を描けないのではないかと思うので、なんとなく目安を見ながら進むほうがいい【安野委員】 ・自分にとって真に確からしいと感じられるもののみを残し、それを余白のある中で鑑賞者や相手に投げかけること。それは、他者の多義的な解釈を認める余地を与えるという意味で、矛盾を内包していると言える。つまり、余白があるということはある種、他者各々の矛盾や多義を許容するのと同じではないか【池坊委員】 ・ルールや制度は道具に過ぎないはずだが、それを盲目的に従うことで柔軟性を失い、個人の裁量や創造性が制限され、「できない理由」が先行する場面が増えている。コントロール不能な事象が多い現代では、計画的なまちづくりでは対応が困難であるため、ぶれや余白を許容し、多様な主体に委ねる柔軟なまちづくりへの転換が必要である。そのためには、小規模で実験的なプロジェクトが自然発生する環境を整え、実験エリアや部署を設置し、多様な主体が参加できる場を創造する必要がある、1つの成功事例を横展開するこれまでのやり方ではなく、あくまでもN=1として、それぞれのケースに柔軟に対応することが求められる。【大竹委員】 ・ボトムアップで作られるのが京都らしいという点では、市民の巻き込み方、市民のエネルギーの包容力も含めていただきたい。市民側のコミットメントをどう作るのかにもつながる【杉田委員】 ・「社会課題」と個々人が「課題」だと捉えることの間には、それぞれの経験や実情に応じて少しずつズレができる。そのズレを尊重する時代では、大きな「合意」を得て全員が何か行動を変えるということが難しい。計画という終わりをデザインするのではなく、どうすれば多様な主体が動き出せるかという始まりをいかにデザインするか、そうした身体の動かし方をいかにして身につけるかが重要ではないか【田口委員】 一人一人に答えがある。京都市民の私はこう考える！みたいな。0.1市民だからここまでは貢献したいとか、0.8の人もこうしたいなどの私的なアンサーを引き出したい【仲田委員】 ・京都を愛する人たちが有機的に動くには、Howの提示ではなく、自分たちでどうすればいいのかを考える余白のある状態を作る必要があるのでは。したがって、ビジョンで示すのはHowではない。共通して目指すビジョン（≒コンパス）が必要。そのビジョンで表現するものは、受け手によって解釈余地があり、時間にとらわれずにゆったりと考えられるものが良いのではないか【三川委員】	京都市民に解釈・行動を委ねる“無計画さ”や“余白”も大切
	・ベストを目指すことはつまり、それ以外はNOになっている。完璧な1以外はダメなものになってしまうと焦りに繋がる。違いを認め合うとか、一旦ベターでとりあえずいいんじゃないか。やりながら直しながら自分のペースで進んでゆけばよいのではないかと、自分自身にも、まちや相手に対してもそう思えるかどうかがとても大事。ベストを目指すと同じまちにの姿になっていく。【大竹委員】	脱成長・脱競争の社会へ。ベストだけでなくベターも認める
	・特に京都は生まれてから大人になるまで、どの年代でも生きた文化に地続きで触れられる機会が多いと思う。しかしながら、特に幼児期の子どもたちやその保護者が参加できる機会や環境は乏しい。そこに空白期が生じることで他人事になる。それは担い手の不足につながる話だと思う【伊住委員】 ・社会的強者が”正しい”まちづくりないし政治活動を行うという旧来のまちや国の在り方の転換点なのは。これまでのマッチョ的な世界観に不足していたのはケアや弱い立場（とされてきた者たち）の視点。具体的には、女性、老人、障がい者、子供など。【大竹委員】 ・人口減少という割には、子育ての機会や場の視点が欠けている気がする【大井委員】 ・ケアは子育てに限らず、私たちの社会を構成する網の目を維持するための重要な労働。ケアを考えることは仕事を考えることとイコール。ケア及び仕事というものを再定位することは、これからの都市を大きく変えるものであり、ひいては京都がどういうまちなのかを考えるうえで避けては通れないように思う【田口委員】 ・京都で大学生時代を過ごしたあと離れていく人が多いのはもったいない。京都を「学ぶ場所」から「暮らす場所」へと見方を変えてもらうために、みんなで支え合いながら子育てや福祉、さらには仕事をケアしていく空気づくりが重要。【三川委員】	誰もが“育む・支える”まなざしを持つ